大檀那となり摂社八幡神社を再建している。

また、慶長十七年（1612）には子息の真種や和泉守徳忠らと共に檀那となって吉備津神社の御釜殿を再建したのを始め、元和元年（1615）の同社本殿・拝殿の檜皮葺屋根の葺き替えの時にも真種・徳忠らとともに檀那として費用の大半を負担している。このほか、同社の回廊の造進等も行った。

智種は元和九年（1623）八月五日に石見で死去し、同所の清水寺と安原谷に埋葬されているが、早島の子孫も智種の功績を忍び天明四年（1784）塩津に供養塔を建立している。

石見銀山の町並み

安原伝兵衛が徳川家康から拝領した「辻ヶ花染丁字文胴服」（国指定重要文化財）
石見銀山清水寺所有・京都国立博物館収蔵

慶長年間に安原伝兵衛が夢のお告げで発見されたとされる「釜屋間歩」（昭和44年国史跡指定）
内部は非公開

石見銀山

戦国時代後期から江戸時代前期にかけての日本最大の銀山である。

鎌倉時代末期に銀が出たという伝説もあるが、本格的に開発したのは博多の商人、神谷寿貞である。海上から山が光るのを見た神谷は領主大内義興の支援と出雲の銅山主・三島清右衛門の協力を得て大永六年（1526）銀峯山の中腹で地下の銀を掘り出した。

鉱脈は石見国東部、現在の島根県大田市大森の地を中心とし、同市仁摩町や温泉津町にも広がっていた。

最盛期の銀産出量は世界全体の三分の一に達し、スペインのペルー副王領ポトシ（現ボリビア）のセロ・リコと並ぶ銀産出地として西欧・中国でも有名になった。

日本を代表する鉱山遺跡として昭和四十四年に国指定史跡となった。現在でも銀山採掘のために掘られた「間歩」と呼ばれる坑道が五〇〇余り残り、龍源寺間歩の一部は一般公開されている。

安原備中守の掛け軸

社名の由来

当社の社名は、由緒によると、貞和六年二月二十一日（1350）吉備津神社からご分霊を勧請してから明治維新まで、「御崎宮」と呼ばれており、享保十一年（1726）神祇官から賜った宗源宣旨にも「御崎宮」と記されている。

平安末期に、後白河法皇が当時流行した歌謡を集め編纂したものに「梁塵秘抄」という今様歌謡集がある。

その中に「一品聖霊吉備津宮、新宮、本宮、内の宮、隼人崎、北や南の神客人、艮みさきは恐ろしや」とあり、この「艮みさき」は、吉備津神社本殿内部の外陣の四隅に祀ってある艮御崎・乾御崎・巽御崎・坤御崎また、中陣の二隅に祀ってある東笏御崎、西笏御崎の内で外陣の艮御崎を指す。

現在でも吉備津神社を中心に、御崎といわれる神社が数多くあり、御崎神社（宮）の多くは吉備津神社の分霊を祀っており、古くは吉備津御崎宮と称し、遥拝所であったと考えられる。

この御崎神社（宮）の中には、丑寅御崎宮または艮御崎と云われるものも多く、平安の昔から丑寅御崎の霊威は畏敬せられており、当社の名称も「御崎宮」とされたのであろう。

明治維新からは鶴崎神社と改称されており、その理由は定かではないが、賀陽氏の古書によると、「神社が鎮座する山の形が鶴が舞っている形に似ていたため、鶴形山といわれていた。また、その山には松が生い茂って、多くの鶴が生息しており、その鶴は山の西南一帯の広い浅瀬を餌場としていた。」と記されている。

鶴が棲む御崎宮という事から鶴崎神社となったと思われる。

明治以前に「御崎宮」と呼ばれていたことは当社の資料を始め種々の文献にも記述されているが、その証となるものは、正面参道の石鳥居に平成八年まで掛けられていた木製額以前に掛けられていたと思われる、石製社号額に刻まれた「御嵜宮」の文字である。

この額は、裏の凸部分が欠けた状態で、保存されており、社名を変更したために、鳥居から外されていたと思われていたが、この度の改築で本殿や上社務所の束石として輪切りにした鳥居の柱を使用していた事が判明した。

明治二十七年以前に何らかの事故により、鳥居が倒壊したと思われる。

御嵜宮の文字が刻まれた社号額

神社の神紋

家紋と同じように、神社にも紋所があり、これを神紋と呼び、また社紋とも呼ばれ社頭に掲げられる事が多い。

神紋は、主として祭神に関する伝承や鎮座地、社名、神職の家紋などによって定められた。神紋を更に①神紋（祭神の紋）、②社紋（神社の紋）、③社家紋に分ける説もある。中でも三つ巴の紋を神紋とする神社が圧倒的に多い。

鶴崎神社の本殿の鬼板には十六弁八重表菊紋が付けられており、この紋章は天皇や皇室を表す紋章とされているため、近世以前はごく限られた神社でのみ用いられていたが、明治十二年に官国幣社において使用が認められてからは、菊紋を神紋とする神社が急速に増えた。

鶴崎神社の祭神は第七代孝霊天皇の第三王子

鶴崎神社と刻まれた社号額